入門
近代経済学

松沢俊雄 □ 赤城国臣 □ 木村憲二 □ 高橋 正

日本評論社

入門
近代経済学

松沢俊雄 □ 赤城国臣 □ 木村憲二 □ 高橋 正

日本評論社

著者紹介

松沢俊雄（愛知大学助教授）

1948年生（岡山），九州大学経済学部卒，同大学院経済学研究科博士課程修了，経済学修士.

赤城国臣（愛知大学助教授）

1945年生（福島），弘前大学人文学部経済学科卒，名古屋大学大学院経済学研究科博士課程修了，経済学修士.

木村憲二（愛知大学教授）

1935年生（東京），関西学院大学経済学部卒，同大学院経済学研究科博士課程修了，経済学博士.

高橋　正（愛知大学助教授）

1932年生（東京），明治学院大学経済学部卒，早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了，経済学修士.

入門近代経済学

1981年12月30日第1版第1刷発行

日本評論社　発行

〒160 東京都新宿区須賀町14　振替東京 0-16

電話　東京　03—341—6161

印刷／港北出版印刷　　製本／難波製本株式会社

検印省略

©1981　松沢・赤城・木村・高橋

ま え が き

今日近代経済学の発展は，あらゆる分野にわたって目ざましいものがある．それは純粋な理論的分野のみでなく，現実の経済的諸問題の分析を対象とする応用的分野でもいちじるしくみられる．大学で経済学を専攻する学生に，今日の経済学の成果のすべてを教え，修得させることは不可能というべきであろうが，彼らがそのさまざまな分野を学ぶにさいして修得しておくべき基礎的理論の存在もみとめられるところである．多くの大学の経済学部ではこのような基礎的理論の修得を目ざす「経済原論」が，1，2年次に必修として組み入れられている．また経済学の専攻者にかぎらず，教養として広く経済学を学ぼうとする人びとのために「教養経済学」も開講されている．

われわれ著者は同じ大学に奉職し，経済原論，教養経済学などを担当しており，かねてからこれらの講義に適したテキストの作成を意図してきたが，今回その出版の運びとなった．執筆にあたっては，豊富な内容をもつ経済理論から必要と思われるものを取捨選択し，それらをていねいかつ平易にのべるという方針をとった．読者の理解を深めるために，できるだけ図をもちい，さらに言葉だけによる叙述ではかえって理解しにくいところは数式による表現もあわせておこなった．

本書は，第1—5章のミクロ経済分析と第6—10章のマクロ経

済分析とからなり，主として経済原論の講義に合わせてあるが，項目の適宜な選択によって教養経済学の講義にも利用できるように構成されている．本の性格上，内容は基礎的でオーソドックスなものを主としているが，現代の経済問題を分析するさいの橋渡しとなるようなものも随所に取り入れている．

一般に共著の場合，ともすれば章間相互の不調和が生じがちであるが，草稿の段階で筆者4人は幾度にもわたって協議を重ね，このような不調和をのぞくとともに相互の啓発によって内容上多くの点を改善することができた．しかし不備な点も数多く存在するだろう．それは読者のご叱正をお待ちしている．本書が経済学を学ぶ学生にとっていささかでも役立つなら，筆者一同にとってこの上ない幸せとなろう．

なお本書の刊行にあたって，筆者4人のうち，最初の書物となる松沢と赤城はそれぞれ大学院でご指導いただいた武野秀樹教授，飯田経夫教授の恩に対し深く感謝の意を表したいと思います．

またこの本の出版の機会を与えてくださり，完成までなにかと御配慮いただいた日本評論社の田中俊郎氏に御礼申し上げます．

1981年11月

執筆者一同

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目　次

まえがき

序章　経済学入門　*1*

0-1　経済学を学ぶむずかしさ　*1*

0-2　ヴィジョンとアパレイタス　*4*

0-3　ロビンズ・ランゲの定義　*7*

0-4　経済循環と経済分析　*12*

基本的な文献の案内　*15*

第1章　消費者行動の理論　*17*

1-1　効用と無差別曲線　*17*

1-1-1　財空間　*17*　1-1-2　基数的効用と序数的効用　*18*
1-1-3　選好関係と効用関数　*20*　1-1-4　無差別曲線とその性質　*22*　1-1-5　限界代替率の逓減　*23*

1-2　最適消費行動　*25*

1-2-1　所得と予算線　*25*　1-2-2　効用の最大化　*27*
1-2-3　さまざまな均衡解　*30*

1-3　与件の変化——比較静学　*32*

1-3-1　所得—消費曲線　*32*　1-3-2　価格—消費曲線　*34*
1-3-3　代替効果と所得効果　*35*　1-3-4　価格効果とギッフェ

ンの逆説 *37*　1-3-5 代替財と補完財 *39*

1-4 需要関数と性質 *40*

1-4-1 需要関数と需要曲線 *40*　1-4-2 個別需要曲線と市場需要曲線 *42*　1-4-3 需要の変化 *44*

1-5 労働の供給 *45*

補論Ⅰ 制約条件付極大化——ラグランジュ乗数法 *49*

補論Ⅱ スルツキー方程式 *53*

文献案内 *56*

第2章 生産と費用の理論 *59*

2-1 序論 *59*

2-2 生産関数 *60*

2-2-1 生産の概念 *60*　2-2-2 生産関数 *61*

2-3 生産性曲線 *64*

2-3-1 総生産物曲線 *64*　2-3-2 平均生産性と限界生産性 *66*　2-3-3 生産の三段階 *68*

2-4 投入の代替 *70*

2-4-1 等（生産）量線 *71*　2-4-2 等量線の性質 *71*

2-5 生産の最適化 *73*

2-5-1 生産の最適化 *73*　2-5-2 コーナー解と拡張径路 *77*

2-6 費用の理論 *79*

文献案内 *85*

第3章 競争的均衡 *87*

3-1 完全競争市場 *88*

3-1-1　需要曲線　*88*　　3-1-2　供給曲線　*89*

3-2　財市場の均衡　*96*

3-3　均衡の存在　*98*

3-4　均衡の安定性　*99*

3-4-1　ワルラスの安定条件　*100*　　3-4-2　マーシャルの安定条件　*101*　　3-4-3　動学的安定条件(a)　*103*　　3-4-4　動学的安定条件(b)　*104*

3-5　一般均衡分析　*107*

3-5-1　企業の均衡　*108*　　3-5-2　家計の均衡　*110*
3-5-3　ワルラス法則　*111*　　3-5-4　投入－産出モデル　*114*
3-5-5　均衡産出量の決定　*116*　　3-5-6　均衡解の存在　*117*
文献案内　*120*

第4章　不完全競争　*123*

4-1　独占市場と均衡　*124*

4-1-1　独占の需要と限界収入　*124*　　4-1-2　独占の均衡　*126*

4-2　寡占　*128*

4-2-1　寡占の行動　*128*　　4-2-2　クールノーの複占市場　*129*
4-2-3　複占の共謀　*134*　　4-2-4　シュタッケルベルグの複占　*136*　　4-2-5　屈折需要曲線　*139*　　4-2-6　売上高の極大化　*144*

4-3　独占的競争の理論　*146*

4-3-1　独占的競争の概念　*146*　　4-3-2　独占的競争の均衡　*148*
文献案内　*152*

第5章　資源配分と社会的厚生　*155*

5-1　総余剰と最適性　*157*

5-1-1　消費者余剰と生産者余剰　*157*　　5-1-2　総余剰の最大化

160

5-2　資源配分の効率性(1)　*162*

5-2-1　パレート最適の概念　*162*　5-2-2　分配の最適性　*163*
5-2-3　生産の最適性　*168*　5-2-4　超効用可能性曲線　*172*

5-3　資源配分の効率性(2)　*173*

5-3-1　生産・分配の最適性　*173*　5-3-2　パレート最適と定式化　*175*　5-3-3　競争的均衡とパレート最適　*177*

5-4　社会的厚生関数と所得分配　*178*

5-4-1　社会的厚生関数の導入　*179*　5-4-2　社会的厚生の最大化　*181*

5-5　市場の失敗(1)　*185*

5-5-1　市場と最適資源配分の失敗　*185*　5-5-2　外部経済・不経済の存在　*186*　5-5-3　外部経済・不経済と最適資源配分　*188*

5-6　市場の失敗(2)　*193*

5-6-1　公共財とその性質　*193*　5-6-2　公共財と最適供給水準　*195*　5-6-3　公共財の供給と市場の失敗　*200*

文献案内　*202*

第6章　国民所得の測定　*203*

6-1　国民所得とはなにか　*204*

6-1-1　生産面からの国民所得　*205*　6-1-2　所得形成面からの国民所得　*206*　6-1-3　二面説・三面説・四面説　*208*

6-2　国民所得勘定　*209*

6-2-1　国民所得の諸概念　*210*　6-2-2　貯蓄と投資の恒等　*216*
6-2-3　国民所得勘定の特徴　*221*

6-3　国民所得概念の問題点　*223*

6-3-1　福祉の指標としての国民所得　*223*　6-3-2　最終需要の

指標としての国民所得　*226*
文献案内　*228*

第7章　国民所得決定の基礎理論　*229*

7-1　消費関数　*230*

7-1-1　絶対所得仮説と問題点　*230*　7-1-2　相対所得仮説　*231*
7-1-3　恒常所得仮説　*234*

7-2　有効需要の原理　*235*

7-2-1　仮定およびモデル　*235*　7-2-2　均衡国民所得の決定　*237*　7-2-3　貯蓄のパラドックス　*241*　7-2-4　乗数理論　*244*

7-3　財政政策　*245*

7-3-1　インフレ・ギャップとデフレ・ギャップ　*245*
7-3-2　定額税モデル　*246*　7-3-3　租税関数モデル　*249*
7-3-4　自動安定化装置　*250*

7-4　有効需要の原理の評価　*251*

文献案内　*253*

第8章　*IS-LM* 分析　*255*

8-1　投資需要と *IS* 曲線　*255*

8-1-1　投資需要の決定要因　*255*　8-1-2　*IS* 曲線の導出　*259*

8-2　貨幣市場と *LM* 曲線　*262*

8-2-1　流動性選好説　*262*　8-2-2　*LM* 曲線の導出　*268*

8-3　同時決定モデル　*270*

8-4　財政政策　*272*

8-4-1　貨幣供給量が不変の場合　*272*　8-4-2　国債の日銀引受け　*275*　8-4-3　財政政策の評価　*276*

8-5　租税政策　*277*

8-6　金融政策　*278*

8-7　要約　*280*

文献案内　*280*

第9章　完結したケインズ・モデル　*281*

9-1　労働市場：新古典派とケインズ　*281*

9-1-1　労働の需要関数　*281*　9-1-2　新古典派の労働市場分析　*283*　9-1-3　ケインズの労働市場分析　*285*

9-2　総需要曲線と総供給曲線　*287*

9-2-1　総需要曲線の導出　*288*　9-2-2　総供給曲線の導出　*291*

9-3　失業の発生と財政・金融政策　*295*

9-3-1　ケインズ・モデルにおける失業の発生　*295*　9-3-2　財政・金融政策　*297*

9-4　おわりに　*299*

第10章　インフレーション理論の現代的展望　*301*

10-1　序論　*301*

10-1-1　構造的インフレ理論と非構造的インフレ理論　*301*

10-2　貨幣数量説　*303*

10-2-1　フィッシャーの交換方程式　*304*　10-2-2　ケンブリッジ方程式　*305*

10-3　インフレ・ギャップ分析　*306*

10-3-1　デマンド・プルの考えかた　*306*

10-4　フィリップス曲線　*308*

10-4-1　フィッシャー＝フィリップスが意図したもの　*308*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

10-4-2　コスト・プッシュ説　*311*

10-5　期待モデル　*313*

10-5-1　フリードマンの考えかた　*313*

文献案内　*316*

引用文献　*319*

<執筆分担>

序章／木村憲二

第1章／松沢俊雄

第1章補論／松沢俊雄

第2章／木村憲二

第3章／高橋　正

第4章／高橋　正

第5章／松沢俊雄

第6章／赤城国臣

第7章／赤城国臣

第8章／赤城国臣

第9章／赤城国臣

第10章／木村憲二

序章　経済学入門

0－1　経済学を学ぶむずかしさ

今日ほど経済学の学びがいのある時代もめずらしいが，それと同時に，今日ほど経済学の学びかたのむずかしい時代もめずらしいようである．

学びがいがあるというのは，今日の経済学が，既存のものの考えかた＝パラダイム（paradigm）の拡充・発展ではなく，パラダイムそのものの変更ないしみなおしをおこなっているということである．クーン（Kuhn, T.S., 1967, 1970）流にいえば，このパラダイムの変更は，それと同時にパラダイム・通常科学・科学社会の三位一体の変化としてあらわれるゆえ，今日という時代はその意味でもたいへんエクサイティングな時代であるといえよう．

今日における経済学学習のむずかしさについては，つぎの三つの種類が考えられる．

第一に，ケインズ（Keynes, J.M.）がマーシャル（Marshall, A.）の評伝のなかでのべているように，経済学の学習を成功させるためには，学ぶ人が多種多様な資質のたぐいまれな組み合わせをもっている，あるいは育てていくことが必要である，というむずか

しさが存在する．これは経済学の本来のむずかしさ，伝統的なむずかしさともいうべきものであるが，今日という時代でもこのむずかしさはそのまま持続している．

念のためにケインズの文章を引用しておけば，それはつぎのようなものである．

“経済学者になる人は，ある程度まで数学者で，歴史家で，政治家で，哲学者でなくてはならない．彼は記号も分かるし，言葉も話せなくてはならない．彼は普遍的な見地から特殊を考え，抽象と具体とを同じ思考の動きのなかでとり扱わなくてはならない．彼は未来の目的のために，過去に照らして現在を研究しなければならない．人間の性質や制度のどんな部分も，全然彼の関心の外にあってはならない．彼は目的意識に富むと同時に，公正無比でなくてはならず，芸術家のように超然として清廉で，しかも時には政治家のように世俗に接近していなくてはならない”（引用は福岡正夫『経済学の考え方』，1978，p. 6）．

それと同時に，上にあげた福岡正夫教授の近著にのべられているように，“しょせん経済学は経済学という学問なんですから，そういう学問固有の芯がなくちゃあ駄目なんです”（p. 8）．つまり第二のむずかしさと考えられるのは，いわゆる学際的研究の発展のなかで，経済学のアイデンティティ（独自性）のようなものをどこにもとめればよいのか，という問題である．

私たちは経済学がその外延的な拡大によって，たとえば一般的な社会システム論のなかに吸収されていくとはあまり考えないほ

うであるゆえ，その方面での心配はしていない．経済学はきっとその広い世界から栄養を吸収して，その固有の芯をより強くすることであろう．したがってその方向での経済学のアイデンティティの確保という，いわば保守的なスタンスをとる必要はなく，どんどん新しい分野へとびこんでゆけばよいと思う．それで雲散霧消するようであれば，経済学のアイデンティティなどというものは最初から存在しなかったか，存在する意義をもたないものであるからである．

ただこの逆の方向の危険性については十分に注意する必要がある．それは，経済学固有の芯のようなものを，経済学の考えかたという姿勢＝スタンスにもとめず，なんらかの固定化したなぞとき＝パズル・ソーヴィングにもとめた場合に発生する危険である．最近の学生諸君はみな一種の試験人間であるゆえ，経済学の学習も，練習問題をつくりそれを解いてゆくというかたちですすめてゆくのがむしろ自然であるかもしれない．その点で，いわゆるプログラム学習に反対ではないが，ただ，自然科学の場合に比してその構成がすこぶるむずかしいであろうと思う．問題は，そのようなスタイルがいっそうエスカレートして，またくわえてなんらかの実利——たとえば国家試験の合格などとむすびついたとき，佐和隆光氏のいう“経済学の制度化”のごときものがあらわれる危険性である（佐和隆光，1979）．

このとき経済学は，なるほど安定したパズルとその標準的な解法をもつようになろうが，その生命である自由な発想を失ってし

まうことになる．赤ん坊をお湯と一緒に流してしまうというのは，おそらくこのような状態をさしていう表現なのであろう．

第三のむずかしさ＝危険は，いわゆる“ないものねだり”になる危険性である．既成の分析用具にとらわれた発想はもちろんよくないが，逆に既成の用具をあまりよく知らずに，これを批判したつもりで，解析できない難問に答えられないという理由で非難するのはまったくの“ないものねだり”である．“ないものねだり”から偶然に有用な分析用具が生まれてくることがないとは申せないが，世の中はそれほど都合よくはできていないのではなかろうか*．

0-2 ヴィジョンとアパレイタス

つぎにシュムペーター J.A. Schumpeter の有名なヴィジョンとアパレイタス（分析用具）の区別について考えてみよう．

“社会の経済状態についてのあらゆる包括的な‘理論’は，二つの，たがいに補完的ではあるが，本質的には別個の要素から成りたっている．第一には，その社会状態の根本的特徴についての……理論家の見方がある．これをかれのヴィジョン（vision）とよぼう．第二には，理論家のテクニックがある．それはかれが自己のヴィジョンを概念化し，それを具体的な命題もしくは‘理論’に転化させるための用具（アパレイタス apparatus）である”．（Sch-

* 『経済セミナー』，1979年2月号所収の拙稿「三つの経済学入門」の最初の部分に加筆．

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.